

た。なお、このプランターには、肥料としてカブトムシ幼虫飼育後の糞粒まじりの腐葉土や、調理時に出た野菜・果物屑といった植物質の残飯のほか、魚の皮や骨等の動物質の残飯も頻繁に投入していた。

また、2017年10月、大阪府箕面市如意谷のマンションのベランダ(地上高約7m)において、同様の環境で100個体以上のハナムグリ類幼虫を発見した。そのまま放置した後の2018年4月22日、野菜の苗を植える際に少しだけ掘り返すと繭と幼虫が見られたので、繭10個を培養土とともにプラスチックケースに入れて飼育したところ、やはり6月下旬に羽化し、全てシラホシハナムグリであった。標本は保管していない。なお、このプランターには、前出の宝塚市の事例とは異なり、動物質の残飯は投入していなかった。

以上は本種の生態に関する知見の一端に過ぎないが、雌成虫が地上付近から地上高7mくらいの高い場所まで、市街地も含め立体的に産卵環境を探索していることがうかがえる。

#### 引用文献

- 飯嶋一浩, 2017. シラホシハナムグリとリュウキュウツツヤハナムグリの産卵場所探索行動およびシラホシハナムグリの幼虫の生息環境. 鯉角通信, (34): 1-7.
- 那須義次・村濱史郎・松室裕之・上田恵介・広渡俊哉・吉安裕, 2011. フクロウの巣から発見されたシラホシハナムグリ(鞘翅目, コガネムシ科). Strix, 27: 67-72.
- 那須義次・村濱史郎・三橋陽子・大迫義人・上田恵介, 2010. コウノトリの巣から発見された鞘翅目と鱗翅目昆虫. 昆虫ニューシリーズ, 13(3・4): 119-125.
- 酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説第2巻食葉群1. 173 pp. 昆虫文献六本脚, 東京.

- (越山洋三 701-2214 赤磐市東軽部 516-1)  
 (下野誠之 561-0883 豊中市岡町南 1-1-10  
 環境科学大阪(株))  
 (中尾浩平 651-2272 神戸市西区狩場台 1-51-70)

#### 【短報】北大東島におけるヘリグロテントウノミハムシの記録

内藤は2018年に沖縄県北大東島を訪れ、同島からは未記録であるヘリグロテントウノミハムシ8個体を採集することができたので報告する。

得られた標本は、

1. 1 ex. (赤褐色型) ; 1 ex. (二紋型), 北大東村海岸, 21. IV. 2018, 内藤採集, 今坂同定.

2~3 m 位の樹木の枝から叩き網法で採集.

2. 5 exs. (赤褐色型) ; 1 ex. (二紋型), 北大東村屏風岩, 21. IV. 2018, 内藤採集, 今坂同定. 3~4 m 位の樹木の枝から叩き網法で採集.

北大東島では赤褐色型と二紋型のみで縁黒型は見られなかった. 標本8頭は内藤が保管している.

ヘリグロテントウノミハムシ *Argopistes coccinelliformis* Csiki (ノミハムシ亜科, テントウノミハムシ属) は, 本州, 四国, 九州, 沖ノ島, 八丈島, 三宅島, 小笠原, 甌島, 奄美, 沖縄に分布することが知られている(木元・滝沢, 1994). 国外でも, 中国, 台湾, 朝鮮半島, インドシナから記録されている(滝沢, 2012).

なお, 本種は元々, 全体赤褐色で上翅の外周~側縁が黒ずむ色彩型(縁黒型: 甲虫図鑑 IV, pl.40, No.19) からこのような和名が付けられたと思われるが, 琉球以南では全体赤褐色(赤褐色型: 図1)のものが最も多く, 縁黒型や, 全体黒色で上翅の中央に赤褐色紋をもつ型(二紋型: 図2)など, さまざまな色彩変異が見られる. 戦前の記録では琉球以南でのみ分布が知られていた. 現在ではヒイラギなど庭木について, 寒冷地を除く本土全域に広がり, 市街地でも庭木等に多く見られる. なぜか本土では上記の様な赤褐色系の色彩変異は見られず, 二紋型のみが知られる.

なお, 今坂の手元の標本を確認したところ, 沖



図1-3. ヘリグロテントウノミハムシ.

永良部島産(図3)で二紋型の赤褐色紋がさらに拡大し、左右の紋が中央でほぼ近接する個体が見られた。これがさらに拡大すると縁黒型、究極が赤褐色型ということになるかと思う。和名の元になった縁黒型は比較的少ないようである。沖永良部島からも新記録となると思われるので、併せて記録しておく。

1 ex., 鹿児島県沖永良部島知名, 27. VI. 1975, 渡辺昭彦採集, 今坂同定・保管。

貴重な標本を恵与頂いた渡辺昭彦氏に感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 林 匡夫・森本 桂・木元新作, 1984. 原色日本甲虫図鑑 (IV). 438 pp., 72 pls. 保育社, 大阪.  
木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 539 pp., 88 pls. 東海大学出版会, 東京.  
滝沢春雄, 2012. 日本産ハムシ科生態覚書 (6). 神奈川虫報, (177): 33-51.

(内藤準哉 260-0001 千葉市中央区都町1-48-16)  
(今坂正一 830-0037 久留米市諏訪野町1736-3)

#### 【短報】沖縄県渡名喜島からのフチトリアツバコガネの記録

沖縄諸島に属する渡名喜島は沖縄本島の北西約60 kmの海上に位置する非常に小さな有人島の一つである(面積: 約3.74 km<sup>2</sup>)。同島におけるコガネムシ類の記録は極めて少なく、これまでにわずか3種が確認されているに過ぎない(藤岡, 2001; 井上, 2013)。筆者らは、2018年夏に渡名喜島で昆虫調査を行った際に、同島初記録と思われるフチトリアツバコガネ *Phaeochrous emarginatus emarginatus* Castelnau, 1840 (アツバコガネ科 Hybosoridae) (図1)を採集したので、ここに報告する。

フチトリアツバコガネは、灯火や腐肉を用いたベイトトラップによく誘引されることが知られている(Kuijten, 1978; 越智, 2012)。今回得られた個体も同様に集落内の街灯下とハブ *Protobothrops flavoviridis* (Hallowell, 1861) の死骸から得られたものである(図2-3)。

2 exs., 渡名喜村集落, 18. VII. 2018, 金子採集・保管(灯火採集); 2 exs., 渡名喜村集落, 1-2. IX. 2018, 吉武採集, 金子保管(灯火採集); 4 exs., アンジェーラ浜, 2. IX. 2018, 吉武採集, 金子保管(ハブの死骸より)。

本種は東洋区全域に広く分布しており、国内か



図1. 採集されたフチトリアツバコガネ。

らはこれまでに四国, 九州, 五島列島, 屋久島, 吐噶喇列島(中ノ島, 宝島, 小宝島, 平島, 悪石島), 奄美大島, 沖縄諸島(沖縄島, 伊平屋島, 阿嘉島, 久場島, 久米島, 粟国島), 宮古諸島(宮古島, 伊良部島, 下地島, 大神島, 水納島, 多良間島), 八重山諸島(石垣島, 西表島, 竹富島, 小浜島, 鳩間島, 与那国島)

の南西諸島全域で確認されている(藤岡, 2001; 細谷ら, 2011, 2016; 越智, 2012; 楠井, 2012, 2016, 2017a, 2017b, 2018a, 2018b)。植生の乏しい小島嶼からも多く記録されていることから、本種は高い適応能力を有していると考えられ、今後、未調査地域のコガネムシ相の解明が進むにつれて、その分布域はさらに拡大するものと思われる。



図2. フチトリアツバコガネが得られたハブの死骸(吉武撮影)。



図3. ハブの死骸を摂食中のフチトリアツバコガネ(吉武撮影)。